

中国のほんの話(20)

中中辞典あれこれ

蔭山 達弥

桜の花が満開になる4月、書店の店頭には新入生向けに各辞典が装いも新たに山と積まれる。とりわけ、各国語の辞典は初級者向きのものから、専門用語だけを集めたものまで、以前とは比較にならないほど多種多様の辞典が出版されている。

かつて、大学の授業で英語の担当教員が授業中、辞書にOED(Oxford English Dictionary)を薦められたことを今でもよく覚えている。外国語の学習がある程度のレベルに達したら、その国の言葉で説明してある辞典(英英辞典、中中辞典等)を是非手元に置くべきである。

中国では辞典を‘字典’と‘詞典’に区別する。漢字1字1字の発音・意味などを調べる場合には‘字典’、語彙を調べる場合には‘詞典’を引く。前者の代表格は『新華字典』、後者の代表格は『現代漢語詞典』である。

今から2年前、2001年1月に刊行された『新華詞典』は当初大きな反響を呼んだ。この改訂版『新華詞典』は字数が230万字から260万字に増え、時代に後れた2,000余りの語彙を削除し、新たに約7,000の語彙を増やした。また、中国の辞典では初めてアルファベットで始まる語彙を収録した。AIDS、HIV、WTO等合計87項目、中でも面白いのは、最近の中国での英語学習ブームやアメリカ留学熱を反映して、GRE(Graduate Record Examination)、MBA(Master of Business Administration)、TOEFLがその中に入っていることだ。

ところで、中国語辞典の中には、親字・見出し語・発音・字義・語義は記載しているが、品詞名を付していないものが結構ある。文法学者高名凱はかつて「実词不能划分词类。」(中国語の比較的具体な概念を表す単語、名詞・動詞・形容詞・数詞・量詞・代詞は品詞に区分することが

できない) また黎錦熙は『新著国語文法』の中で、「凡词类依句辨品、离句无品。」(あらゆる品詞は文の中で区分できるのであって、文を離れてしまうと品

詞名を付けられない)と述べている。現在、中国では文法機能による品詞区分が主流である。

昨年夏、北京師範大学で実施された外国人中国語教師研修団に参加した際、授業を担当された同大学漢語文化学院丁崇明氏が、品詞の分類において最も信頼の置ける辞典として、商務印書館から出版されている『応用漢語詞典』(2000年版)を紹介された。例えば‘紅’を引くと、形容詞(赤い)、動詞(赤くする)、名詞(ボーナス)の3つの品詞、7項目に分類している。『応用漢語詞典』(2000年版)は従来の注音、解釈、用例のほかに、品詞名、名詞に使われる量詞の列記、類義語の説明などを加えた、外国人学習者向けの多機能型文法辞典と言えよう。

さて、中国と日本では同じ漢字を使っている、意味が異なる場合がよくある。例を挙げると、「腿」は日本では膝から上の部分を指すが、中国では足首から上を指す。このような時、中英辞典を引くと、よく解る。中英辞典を見ると、「腿」は‘leg’、「脚」は‘foot’と訳している。同じような例は枚挙にいとまがない。日本語の‘歩く’は中国語では‘走’という字になる。中英辞典の「走」を見ると、‘walk’‘leave; go away’となっている。中日辞典でイメージがつかみにくい単語は中英辞典を引いてみよう。北京語言文化大学から出ている『漢英双解詞典』が外国人学習者向けに編集されていて良い。

外国語辞典を一冊だけに頼るのは土台無理な話、常に手元に何種類も置いて利用し、それらの辞典を引く回数が増えれば増えるほど、あなたの中国語の実力は本物になるだろう。外国語をマスターしたければ、辞書にお金を惜しまないこと。

かげやま たつや(助教授・中国文学)

